カット野菜 生産能力2倍

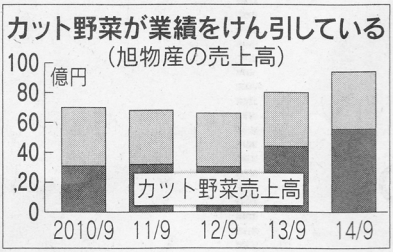
旭物産、水戸で工場移転

37億円投資、開発も強化

既存の水戸工場には新たに最新設備を導入するだけのスペースが無い（水戸市）

カット野菜製造大手の旭物産（水戸市、林正二社長）は水戸市内に新工場を建設する。2017年春に既存工場からの移転完了を目指す。投資額は37億円で、生産能力は既存工場の2倍となる。カット野菜市場は拡大とともに消費者ニーズも多様化しており、増産とともに商品開発の幅を広げる。

旭物産は茨城県内で3工場を稼働しているが、生食用のカット野菜は全て水戸工場（水戸市）で製造している。現在の生産能力は金額ベースで50億円。このほど着工した新工場は水戸工場から近く、同工場の機能を全面移管する予定で、16年内の完成を目指す。



新工場の延べ床面積は約1万平方㍍と水戸工場の2倍以上の広さで、生産能力も100億円と倍増する見通し。工場には新たな製造設備を導入し、多様な商品開発につなげるという。

旭物産はスーパーのプライベートブランド（PB＝自主企画）商品など100種類以上のカット野菜を生産している。近年ではスーパーからの新商品開発の要望は多様化し、例えばゆでた野菜をパックして電子レンジで温めて食べるカット野菜の要望などがある。現工場ではこれらの商品に対応できるだけのスペースがなかった。

独自のNB（ナショナルブランド）の開発強化も狙う。旭物産が13年に発売した「12品目のサラダ」は袋の中で色合いや食感を重視して選んだ12種類の野菜が混ざらないよう詰め合わせた商品。混ぜた製品に比べて見栄えがよくなるという。実売価格は300㌘で270円程度と割高だが、生産が追いつかなくなるほどの人気を集めた。新工場ではこうした新商品開発にも力を入れる。

新工場では水戸工場に続いて食品の安全に関する国際規格「FSSC22000」の認証も得られる予定だ。敷島製パンやキューピーなど大手食品メーカーで導入する例はあるが、カット野菜工場ではまだ珍しい。

旭物産はかつてモヤシ商品の製造が主力で、小美玉工場（小美玉市）で製造を続けている。だがモヤシは原材料が高騰しているのに加えてスーパーの店頭で特売対象となりやすく利益率も低い。

農畜産業振興機構によると、12年度のカット野菜の市場規模は約1900億円。共働き世帯や高齢者らの支持を集め市場が拡大している。野菜の種類や製法の工夫で付加価値を高めた利益率の高い商品も開発しやすい。新工場で主力事業となったカット野菜事業をさらに強化する。

旭物産は1971年の設立。2014年9月期の売上高は94億円で、カット野菜は6割程度を占める。